

京都大学教育研究振興財団助成事業  
成 果 報 告 書

平成24年9月14日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団  
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 理学研究科・生物科学専攻動物学教室

職 名・学 年 博士課程2年

氏 名 東島 沙弥佳

助 成 の 種 類	平成24年度・若手研究者在外研究支援・国際研究集会発表助成		
研 究 集 会 名	第18回ヨーロッパ人類学会議		
発 表 題 目	Tail length estimation from sacro-caudal skeletal morphology in catarrhines		
開 催 場 所	トルコ (アンカラ大学)		
渡 航 期 間	平成 24年 9月 1日 ~ 平成 24年 9月 9日		
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有( )		
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	200,000円	
	使用した助成金額	200,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	航空運賃 (160, 680円)	
		宿泊費 (57, 000円 (1ユーロ100円換算))	
学会参加費 (10, 000円 (1ユーロ100円換算))			
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。)		

## 成果の概要／東島沙弥佳

理学研究科 生物科学専攻 自然人類学研究室 博士課程 2年

東島 沙弥佳

学会名：第 18 回ヨーロッパ人類学会議

期間：平成 24 年 9 月 1 日～9 月 6 日

場所：トルコ・アンカラ大学

### 成果の概要

第 18 回ヨーロッパ人類学会議 (The 18th Congress of European Anthropological Association) に参加するため、京都大学教育研究振興財団・平成 24 年度国際研究集会発表助成Ⅱ期による支援を受け、トルコへ赴いた。筆者は、”Tail length estimation from sacro-caudal skeletal morphology in catarrhines” と題し、最終仙椎の形態が尾長をよく反映すること、また従来の研究では一まとめにされ、定量的推定ができなかった尾の短い狭鼻猿において、より正確な尾長推定が可能であることについて、ポスターで報告した。開催地は、首都アンカラ。関空からイスタンブールを経由し、15 時間ほどかけて到着した。首都とはいっても、市街地の規模は飛行機の窓からのぞき見たトルコ最大の都市イスタンブールに遥か及ばない。しかし観光地らしからぬ平穏な街の様子は反対に、国際学会の開催場所には最適だったように感じた。会期は 2012 年 9 月 3 日から 9 月 6 日。この 4 日間、過去に開催された同学会のうち最大だったという 200 人を超す参加者が、アンカラ大学に集った。

今回の学会に参加し、得られた重要な成果は、普段接する機会のない分野の外国人及び日本人研究者との交流を深め、今後研究を進めていく上で必要不可欠な協力関係を構築できたことであった。

### 第 18 回ヨーロッパ人類学会議について

学会初日に感じた第一印象は正直なところ、えらく畑違いのところへ来てしまったのかもしれない、というものだった。上述したとおり、今回の第 18 回大会は過去 17 回に比べ参加人数は最多。ポスター発表だけでも、その数は 180 を超える。それに加え、73 件の口頭発表、大御所による特別口演 5 本という、盛りだくさんな内容であった。しかし、その 9 割以上が、現代人に関するもの、さらにその半数以上は生体に関する研究で占められていたのである。筆者のように、非ヒト霊長類をメインに据えた研究は数少ないだろうと踏んではいたが、この比率はさすがに予想外だった。筆者が以前参加したアメリカ形質人類学

会や、日本の諸学会では、非ヒト霊長類に関する研究が約半数ほどはある。ヨーロッパで言う人類学と、アメリカや日本でいう人類学。同じ言葉であり、それはヒトに関連する全ての研究を含むのだが、指す意味合いに若干のずれがあることを、身をもって実感した。化石に関する研究は数件あったが、どれもネアンデルタール以後のものを扱っていた。また、ヒト以外の動物については動物考古学的発表も数件あるものの、それはヒトによって利用された家畜動物に関するもので、動物遺存体を用いてはいるが、ヒトの生活様式を知ることが主目的の研究であった。非ヒト霊長類を題材にした研究発表は、筆者のもののみだった。完全なアウェイ状態である。今回の発表、果たして誰か聞きに来てくれるのだろうか。最初は意気消沈したが、気を取り直し、ならば積極的に自ら売り込んでいくしかない。と決め、ポスターの前へ向かった。

### 自身の発表内容と得られた成果

筆者はこれまで、狭鼻猿（アジア・アフリカに棲息する霊長類で原猿類を除いたもの）における定量的尾長推定法の確立を目指し、研究を進めてきた。狭鼻猿の中には、極端な尾長短縮や尾の喪失が生じているものがあり、その進化過程を解明するには化石資料からの尾長推定が欠かせない。しかし先行研究は尾長を段階的に推定するのみに留まっており、尾長短縮過程の復元に特に重要な「短尾」とされる区分の幅が広がった。そこで、和歌山県で捕獲された尾長に大きな変異のある交雑マカク (*Macaca fuscata* x *M. cyclopis*) を用いて、仙尾部骨格形態からの定量的尾長推定を試みた。仙骨から第 3 尾椎までの 20 項目を計測し、値を基準化して、複数の重回帰モデルを作成した。交雑個体において当てはまりのよいモデルには、それ以外の狭鼻猿 15 種を適用し、他種への適用可能性を検証した。その結果、最終仙椎の形態が尾長をよく説明すること、また、交雑個体において当てはまりのよいモデルでは、マカクのみならず、他の「短尾」狭鼻猿種においても、正確に定量的尾長推定を行うことができることが明らかになったので、これを発表した。

恐らく、非ヒト霊長類に関する研究は少ないだろうと予想していたので（まさかあれほど少ないとは思ってはいなかったが）、数式や数字を可能な限り減らし、先行研究の問題点、方法や結果を図示することで、専門領域が異なる研究者にも興味を持ってもらいやすいポスター作りを心がけた。それが功を奏したのか、あれほど畑違いな学会だったにも関わらず、ポスター前を通るほとんどの人が足を止め、見入ってくれた。大変興味深いという言葉や、ポスターのデザインが大変良いので分かりやすいといった言葉も多く頂き、1 時間半のコアタイム中に、7 人の外国人研究者と議論を交わすことが出来た。皆専門領域がまったく異なるため、とんできると質問は予想外のものが多く、とても新鮮な気分だった。サルを専門としない研究者に自身の研究の面白さを伝えるには、今後どのように説明を工夫すればよいのか、退屈しないで最後まで聞いてもらうにはどう面白おかしく話せばよいのかな

ど、学ぶことがとても多く、刺激的な時間を過ごす事が出来た。また、外国人研究者ばかりでなく、数少ない日本人研究者とも知己になることができた。

できるだけ多くの人と交流する機会が欲しかったので、自身のコアタイム以外にも、時間が空けばポスターの前に立ち、積極的に他の研究者との交流を図った。結果、論文を送ってほしいということで数人と連絡先を交換した。

今回の学会は思った以上に非ヒト霊長類に関する研究が少なく、当初は戸惑ったものの、蓋を開けてみれば、ここに来なければ一生涯知り合うことも無かったかもしれない、人類学という広い世界の中の異なる分野で仕事をする多くの研究者達と交流が持てた。幅広い議論を交わすことが出来た。今後必要なときには協力しようという、重要な人間関係を築くことが出来た。これは滅多に得ることのできない貴重な成果であったと筆者は考えている。

## 謝辞

このような貴重な機会を得る事ができたのも、京都大学教育研究振興財団からの支援があったからこそである。末文ながら、深謝申し上げたい。



写真1 会場であるアンカラ大学（大阪産業大学・成山公一先生撮影）



写真2 説明中の筆者（大阪産業大学・成山公一先生撮影）

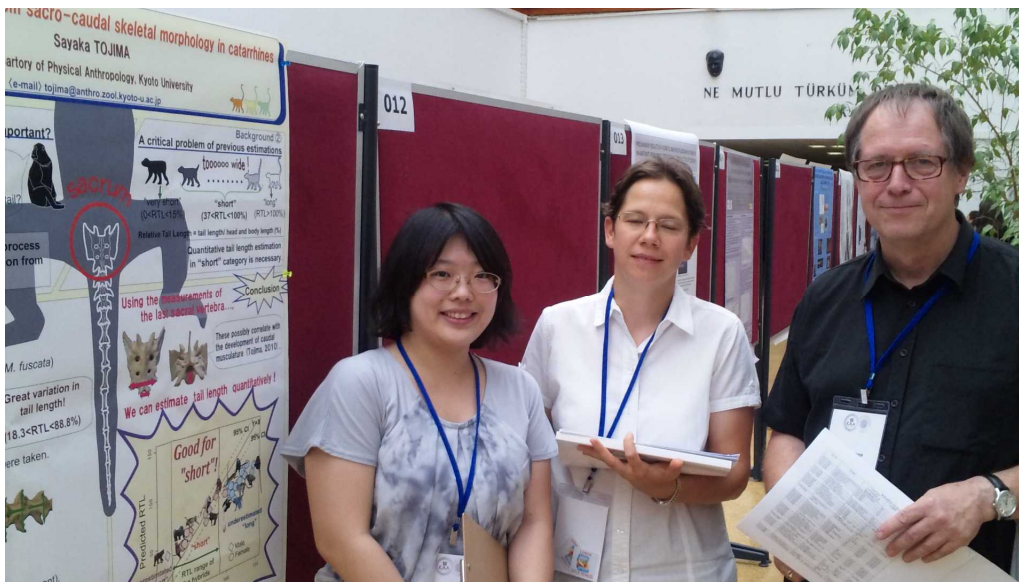


写真3 筆者のポスターと筆者と他の研究者（大阪産業大学・成山公一先生撮影）